

わたしの修習時代

紀尾井町：1948－70

湯島：1971－93

和光：1994－

49期

十和田の暗闇



会員 飛田 博 (49期)

49期

私は、修習の期で言うと49期である。同期には大阪市長の橋下徹氏や元大阪市助役の大平光代氏がいる。修習が始まる年（1995年）にオウム事件や阪神淡路大震災が起こり、修習が終わって勤め出した年（1997年）に、北海道拓殖銀行や山一証券が破綻した。その合間の修習生活だったが、まだ本格的な不況に突入する前の時期であり、比較的のんびりした時期であったと思う。司法研修所は、和光市に移転してから2年しかたっており、建物や寮がとてもきれいだった。実務修習地については、当時、できるだけ東京から離れたと考えて、那覇、札幌、旭川、青森などの希望を出したところ、青森に決まった。青森では、2度のねぶた祭り大雪の冬を経験した。青森の先生方は、とても丁寧に我々修習生のお相手をしてくださったので、本当に幸運だったと思う。

十和田湖畔で遭難したこと

当時、東北の実務修習生は、夏に青森の十和田湖畔のホテルに集められて、二回試験に向けて2日間の合宿が行われていた。1日目の刑事弁護の講義の際に、教官から「湖畔にある乙女の像のところから山に登ったら、朝日が湖に映りながら昇ってくる素晴らしい風景を見た。」との話を聞いた。そこで、講義が終わった後、夕食までの休憩を利用して、同じ青森修習の大坪和敏会員と乙女の像のところから山を登り出した。ところが、途中で道がなくなってしまい、急な林の斜面を草木をかき分け進むという状態になってしまった。夕食の時間も迫ってきたので、大坪会員は「ホテルに帰ろう」と言ったのだが、私は意地になって「頂上まで行く。大坪さんは先に帰ってくれ。」と答えたとこ、大坪会員は本当に帰ってしまった。そこで、私は一人で登ることに

なったが、結局、頂上らしきところは現れず、引き返すことにした。しかし、そこから迷ってしまった。湖面は見えるので、左に進めば、もとの乙女の像のところにたどり着くと思っていたのだが、行けども行けどもたどり着かない。そのうち暗くなってきて、「助けてくれ！道に迷いました！おーい！」などと大声で叫んでも、全く反応がなかった。今なら携帯を取り出すところだが、当時は携帯などない。仕方なく一晩野宿することに決めた。真っ暗な中、林の中にうずくまっていたが、蚊がたくさんいるのには本当に参った。死ぬとは思わなかったが、マズイことになったと頭を抱えた。数時間たったころ、懐中電灯の明かりが見えて「おーい」という声が出た。大坪会員が地元の消防団数名と一緒に助けに来てくれたのだ。ようやく「助かった」と思ったが、実はその後が長かった。消防団の人たちと林の中を歩き始めたが、いつまでたっても乙女の像にはたどり着かない。どうやら湖に突き出た半島部分に迷い込んでいたらしい。最終的に、消防団がボートを呼んでくれて、ボートに乗ってホテルの近くまで帰ってきた。

ホテルでは大騒ぎになっているかと思いきや、夕食後の懇親会が終わったところであり、皆私のことを見て、「どこ行っていたの？」という感じであった。しかし、教官たちの間では大騒ぎになっていたらしい。幸いなことに、夜12時前に救出された場合には『遭難』ということにはならないらしく、新聞沙汰になることは免れた。

実務修習地に帰ったときは、ちょうど裁判所での研修中であったが、そういう人と思われていたのか、私は担当裁判官からあまり怒られず、何故か、大坪会員が、「どうして飛田を一人で行かせたのだ」などとひどく怒られた。そのため、その後2ヶ月くらい、大坪会員は私と口をきいてくれなかった。しかし、今は、大の親友である。あのときはすみませんでした。